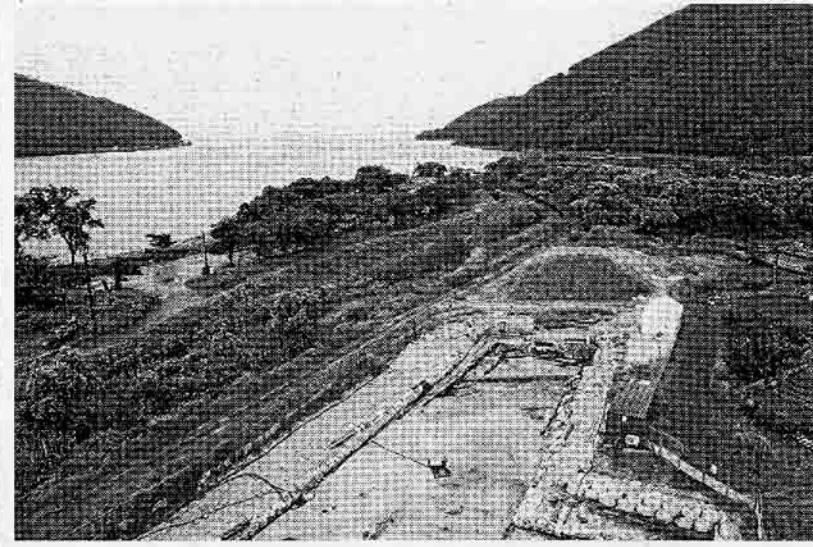


新連載「考湖学」10日スタート

塩津港遺跡と琵琶湖。中国大陸や北陸から運ばれてきた大量の物資や人が塩津港で風を待ち、大津に向けて出航した—西浅井町



大陸から畿内へ 交流の運河

——滋賀県は、京都府、奈良県に次いで多くの国宝、重要文化財の数を誇る文化財の宝庫ですが、琵琶湖と関連はあるのでしょうか。これは、「琵琶湖をめぐる信仰」から考える必要があります。ひとまず、奈良時代にさが歴寺が隆盛します。のぼってみましょう。なぜ甲賀を守る鎮護神市の中香堂がつくられ、大仏淨土真宗やが造られようとしたのか。紫香楽宮は靈山、聖地に開まれ、仏教に求められた神聖性がありましたが、それで、琵琶湖をめぐる信仰を建立します。平安時代になると、それも、靈山や、鎮護神として、また、役割を担う

仏教の聖地

場港を結んだ船のことがですが、この歌は、陸路に比べると風待ちをしないといけない不便さはあるものの、楽で速い湖上交通の方が、むしろ一般的だったことを示しているのではないでし

いては、「急がば回れ」ということわざがよく表しています。このことわざの語源は、「ものふの矢橋の船は速けれど急がば回れ瀬田の長橋」という歌からきています。矢橋の船とは、

連載では、まずそのあたりを明
らかにしていきます。

大津宮の周辺には、多くの渡
来人が居住していたことが知ら
れていますが、国際交流にあた
つての通訳や交易の管理のため
に、彼らが移配されていたので
す。これが、大津に都が置かれ
た要因であると考えられます。

湖上の覇 ともに、日本海ルートも重要視されていました。その中で、琵琶湖、そして大津が重要な役割を担っていたのです。

A black and white photograph of a young man with dark, wavy hair. He is wearing a light-colored, button-down shirt with a subtle plaid pattern. He is looking directly at the camera with a neutral expression. The background is a textured, light-colored wall with some architectural details like a balcony railing visible on the right.

「考湖学」の連載に期待して
ほしいと語る畠中英二さん

湖上の霸権 天下統一の鍵

です。車も電車もなかったら、自然的特性が、海上交通とは違
想像してみてください。大津から草津へ行くのに船を使いたく
なるのは、「ごく自然な」と思
えませんか。急ぎの旅以外なら、信長によつて琵琶湖の城郭と
湖上をゆられていった。「急が
ば回れ」は、湖上交通が発達し
た琵琶湖の様相を示していま
す。

戦国時代の琵琶湖はどう
だったのでしょうか

織田信長がガレー船といわれ
る幻の巨大船を浮かべたことが
良く知られていますが、琵琶湖
は特に南湖の水深が浅い地形的
特性から、大型船は採用されな
い。東海道や中山道が思い浮かびま
す。

湖上交通の掌握は、秀吉の大津
本船に引き継がれています。
この時代については、10回目
以降に予定しています。

江戸時代の交通といえば
、

日本の歴史の中で大きな役割を果たしてきた琵琶湖



▲ 海と絶海へと、海をつなげて、スエズ運河のように、日本の海上交通にとって、琵琶湖がいかに重要であったかを物語る事象です。20回目あたりで詳しく説します。

開削は、20回も試みられていて、これが記録に残っています。琵琶湖疏水を設計した山辺朔朗は、この計画をしていました。近代の鉄道敷設以降も、運河開削計画は度々なされています。地中

津の地位は低下します。たゞし、瑞賀はもう一つの航路をこうとしていた。それは教賀塩津間の運河です。

これが米相場の指標となつていいのです。その時点では、日本経済の中心地が大津にあつたとを物語っています。

しかし、17世紀半ば^{江戸時代}になると、村瑞賀が拓いた西回り航路に

江戸時代の交通といえ
東海道や中山道が思い浮かび
すが、琵琶湖の水運は衰退し
のでしようか
いいえ、大津百艘船を引き
ぎ、江戸時代前期の大津に藏

まを掌握する」とが、大ト統の条件になつていきます。そく湖上交通の掌握は、秀吉の大百艘船に引き継がれていきす。

戦国時代の終わりになると、信長によって琵琶湖の城郭が、ツトワークが形成されます。これが、改化している湖上交通の開拓が分かっています。